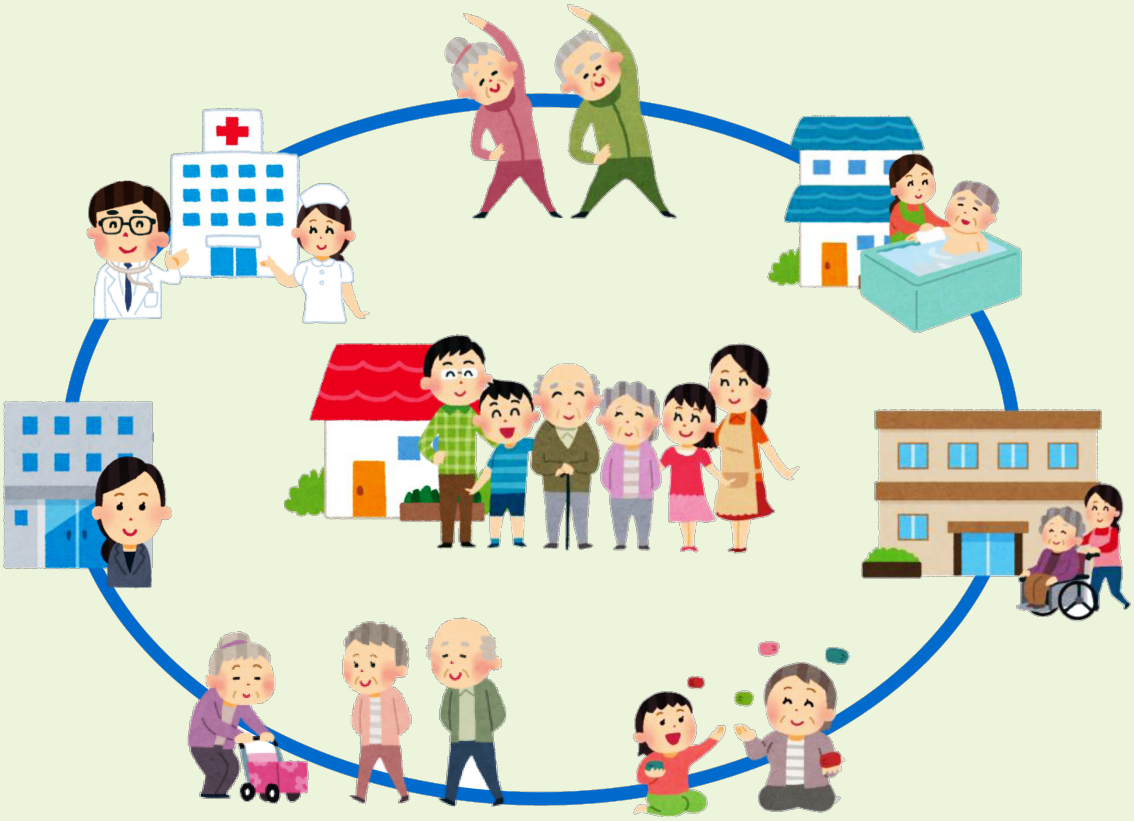
高齢者地域活動活性化検討会議報告書

～高齢者が高齢者を支えるまちづくりをめざして～



一般財団法人 山口県老人クラブ連合会
〔きららシニア山口〕

目　　次

１　高齢者地域活動活性化へ向けて

（１）　背景　　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１

（２）　現状の課題と対策　・・・・・・・・・・・・・・・・・　５

（３）　高齢者の地域活動活性化のポイント　・・・・・・　７

ア　地域包括ケアシステムの中での老人クラブの役割とは

イ　若手・女性会員の増強

（４）　会員増強につながる仕組づくり　・・・・・・・・　１０

ア　老人クラブがめざす４つの視点から施策を導く

イ　老人クラブの特異性及び存在意義とは

ウ　これからの老人クラブは

（５）　全国老人クラブ連合会からの提唱　・・・・・・　１４

（６）　会員増強への主な取組　・・・・・・・・・・・・　１７

２　高齢者地域活動活性化検討会議各委員からの提言・・　１９

３　高齢者地域活動活性化検討会議設置要綱・・・・・・　２４

４　高齢者地域活動活性化検討会議委員名簿・・・・・・　２５

高齢者地域活動活性化へ向けて

【背景】

山口県の高齢者と地域の老人クラブの現状と課題

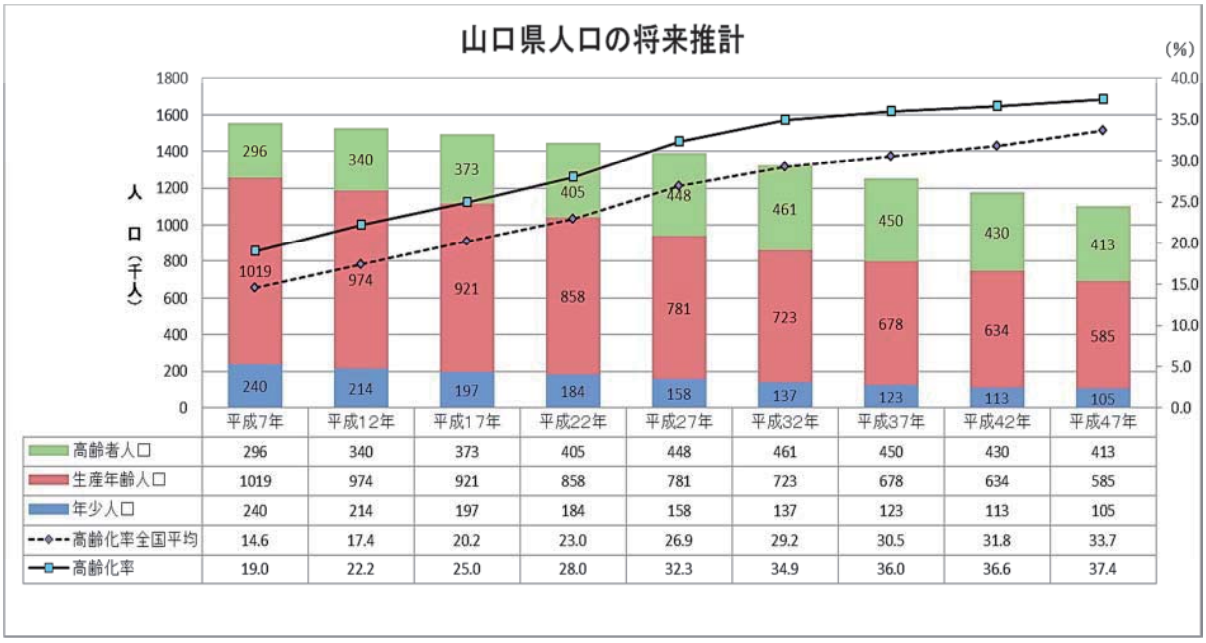
内閣府のデータより日本の総人口は、平成 25 年 12 月現在でおよそ 1 億 2,727 万人でそのうち 65 歳以上の高齢者は、3,207 万人と全体の 25.2%を占めています。今後長期の人口減少過程に入り、平成 38 年には 1 億 2,000 万人を下回り、その 22 年後にはいよいよ 1 億人を割ると言われています。

このように今では 4 人に 1 人が 65 歳以上の高齢者となっています。また、団塊の世代(昭和 22～24 年生まれ)が 65 歳以上になる平成 27 年には、188 万人増えて 3,395 万人となり、さらにその 10 年後には、262 万人増の 3,657 万人と見込まれ、およそ 3 人に 1 人が高齢者になると予測されています。

その中で、65 歳以上が総人口に占める割合を高齢化率といいますが、山口県では、現在約 30%となっており、平成 27 年度にはさらに進み、全国第 3 位の超高齢県になる見込みで、これは全国平均より約 10 年早く高齢化が進んでいます。

山口県の高齢化率の推移と将来推計人口が下の図 1 です。

図 1



	平成7年	平成12年	平成17年	平成22年	平成27年	平成32年	平成37年	平成42年	平成47年
高齢者人口	296	340	373	405	448	461	450	430	413
生産年齢人口	1019	974	921	858	781	723	678	634	585
年少人口	240	214	197	184	158	137	123	113	105
高齢化率全国平均	14.6	17.4	20.2	23.0	26.9	29.2	30.5	31.8	33.7
高齢化率	19.0	22.2	25.0	28.0	32.3	34.9	36.0	36.6	37.4

※高齢者人口：６５歳以上　　生産年齢人口：１５～６４歳　　年少人口０～１４歳

(注) 平成２２年以前の総人口には、年齢不詳分を含まない。

(資料) 平成２２年以前：「国勢調査」(総務省)

平成２７年以降：「日本の都道府県別将来推計人口（平成１９年５月推計)」(国立社会保障・人口問題研究所)

このままでは高齢の夫婦世帯、一人暮らしの高齢者がますます増え、高齢者の生きがいづくり、高齢者同士の支え合い、さらには地域貢献活動の低下が避けられません。

そこで必要とされるのが、その**高齢者の地域活動の活性化**と**高齢者のリーダー役である老人クラブの活性化**です。

その老人クラブに視点を当ててみます。

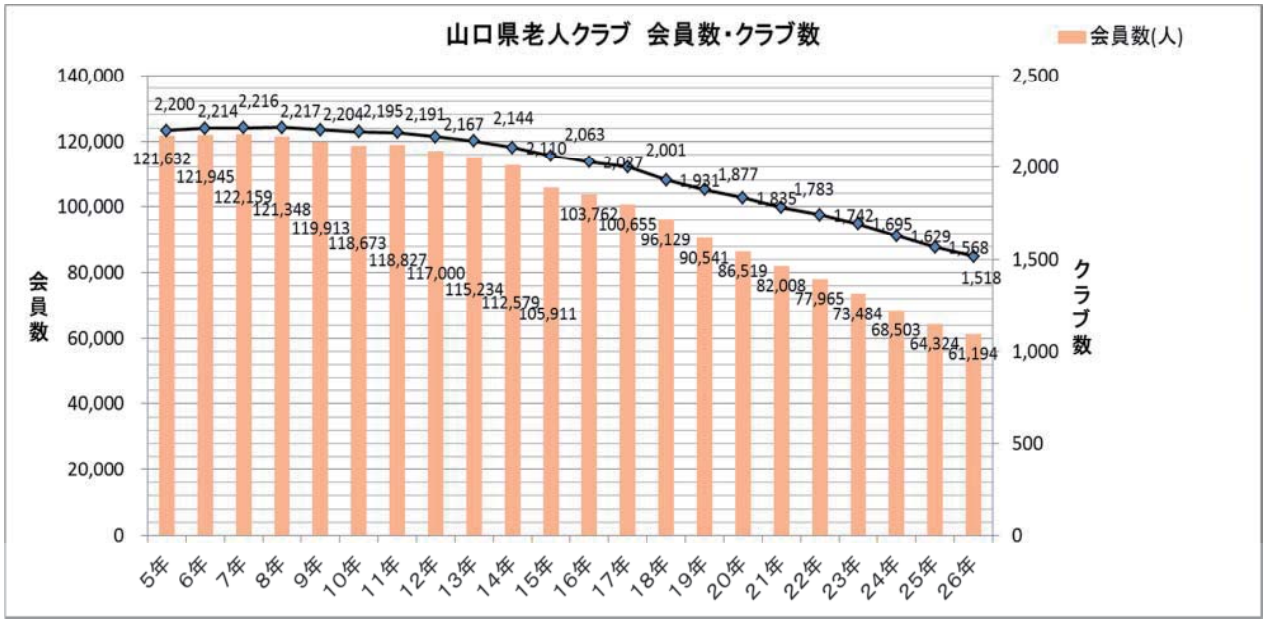
全国都道府県、政令都市をまとめております公益財団法人　全国老人クラブ連合会によりますと、平成 10 年の会員数 887 万人、クラブ数約 13 万 4 千クラブをピークに現在では、会員数約 237 万人、クラブ数で約 2 万クラブが減少しています。

山口県でも、老人クラブ 50 年の歴史の中で、平成 7 年の会員約 12 万 2 千人をピークに平成 26 年では 6 万 1 千人と 50%も減少している状況で、特に平成 17 年からは毎年、4,000～5,000 人の会員が減っています。また、減少しているのは会員だけでなくクラブ数も同様で、ピーク時の 2,200 クラブから 1,500 クラブへ減少しています。

過去において、全国老人クラブ連合会の施策として平成 22 年度から平成 24 年度において、「老人クラブ活性化 3 か年計画」が全国において実施されましたが、結果的に会員増にはつながりませんでした。

山口県内の老人クラブの会員数及びクラブ数の推移を表したものが次の図で示されます。

図 2



また、下の表及び図は、地域別の老人クラブ加入率（会員数／60 歳以上推計人口*100）の推移を示しています。

表 1

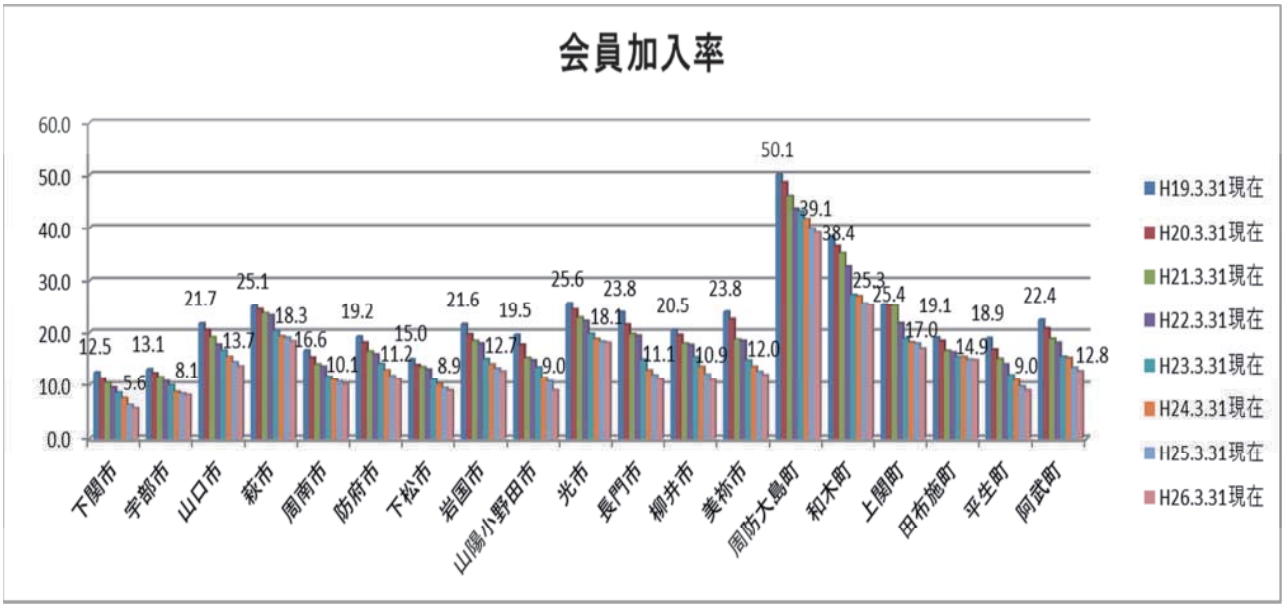
山口県老人クラブ加入率推移

（%）

	H19.3.31現在	H20.3.31現在	H21.3.31現在	H22.3.31現在	H23.3.31現在	H24.3.31現在	H25.3.31現在	H26.3.31現在
下関市	12.5	11.3	10.4	9.5	8.5	7.5	6.3	5.6
宇部市	13.1	12.4	11.6	10.7	9.9	8.7	8.3	8.1
山口市	21.7	20.5	19.1	17.7	16.7	15.5	14.4	13.7
萩市	25.1	24.4	23.6	23.2	20.3	19.3	19.0	18.3
周南市	16.6	15.3	14.0	13.6	11.7	11.0	10.6	10.1
防府市	19.2	18.1	16.4	15.9	14.1	12.9	11.8	11.2
下松市	15.0	13.9	13.5	13.1	11.0	10.1	9.4	8.9
岩国市	21.6	19.7	18.4	18.0	15.0	14.1	13.2	12.7
山陽小野田市	19.5	17.7	15.3	14.8	13.5	11.5	10.7	9.0
光市	25.6	24.3	22.8	22.2	19.7	18.8	18.3	18.1
長門市	23.8	21.5	19.7	19.4	14.9	12.9	12.0	11.1
柳井市	20.5	19.6	17.9	17.6	15.4	13.6	12.1	10.9
美祢市	23.8	22.5	18.7	18.4	14.8	13.6	12.7	12.0
周防大島町	50.1	48.6	46.1	43.6	43.2	41.7	39.8	39.1
和木町	38.4	36.5	35.2	32.7	27.3	27.0	25.6	25.3
上関町	25.4	25.1	25.1	21.7	18.9	18.2	17.9	17.0
田布施町	19.1	18.4	16.6	16.3	15.4	15.4	14.9	14.9
平生町	18.9	16.9	15.1	14.1	12.0	11.0	9.7	9.0
阿武町	22.4	20.8	18.8	18.1	15.5	15.3	13.4	12.8
全体	19.0	17.7	16.3	15.5	13.8	12.6	11.7	11.1

※加入率分母は、各前年 10 月 1 日「総務省人口推計」60 歳以上人口

図 3



高齢化率（65 歳以上推計人口／総人口*100）が年々上がっているのに対し、老人クラブへの加入率は、どこの市町も下がっています。

老人クラブの会員も高齢化しており、このままでいくとさらに高齢化率と老人クラブの加入率のギャップが大きくなっていくと思われます。

次に、山口県の老人クラブの男女及び年齢別の構成比をグラフに示しています。

図 4

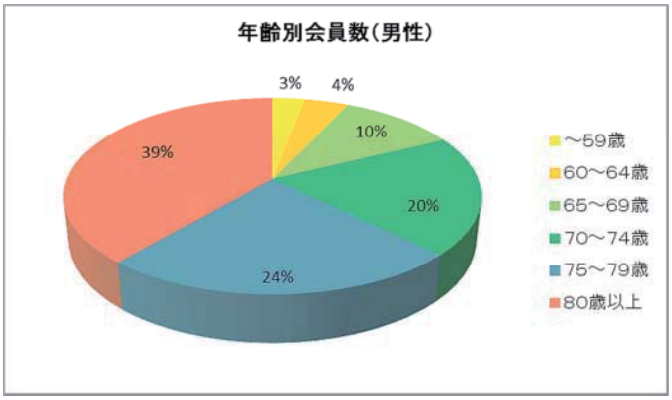


図 5

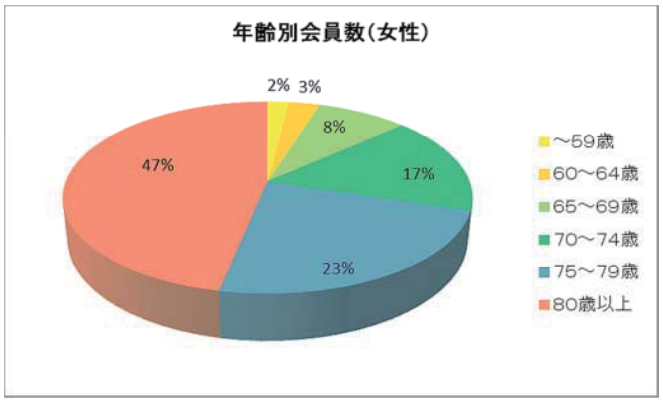
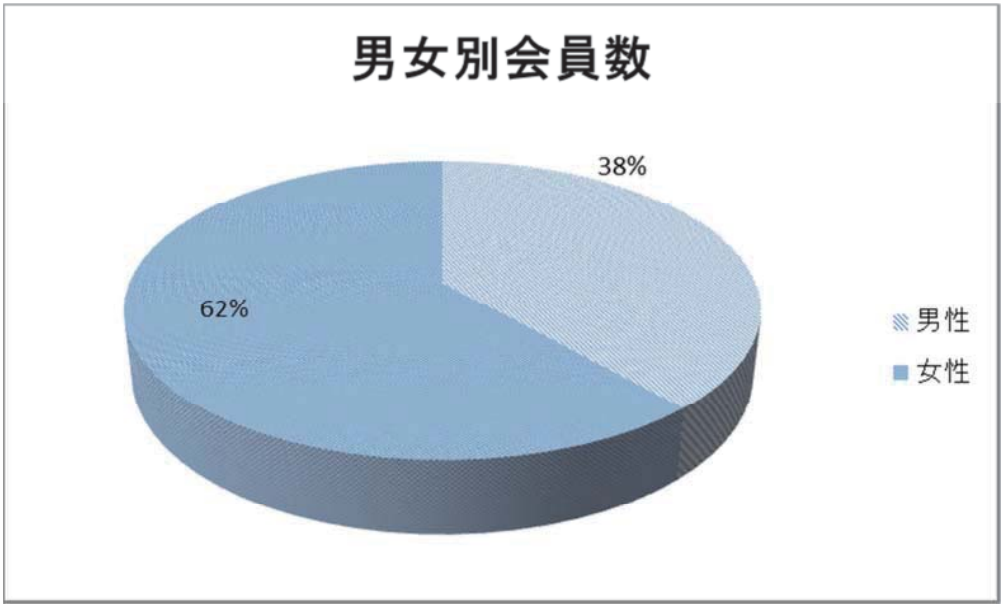


図 6



※平成 26 年度市町老連実態調査より

図 4、図 5 より老人クラブの年齢構成では、70 歳までの若手会員が非常に少なく、75 歳以上が全体の 60～70%を占めており年々クラブ内での高齢化がさらに進んでいく傾向にあります。

また、男女構成では平均して女性会員が全体の 6 割を占めているのが現状です。

以上、統計数値の推移をみていくと、県内の老人クラブの置かれた状況はかなり厳しいことがわかります。

では、なぜここまで老人クラブの状況が変化してきたのでしょうか。

これまでの統計数値を背景に山口県の老人クラブには次のような現状と課題があります。

【現状の課題と対策】

１　クラブのＰＲ不足、閉鎖的で活動自体を知らない高齢者もいる。

この課題は、地域における老人クラブの名前や活動が住民に周知、浸透されていないことが要因です。もっと地域に対して貢献活動を行っているのであれば、自治会の広報誌・回覧板等を通じてアピールしなければいけないのではないでしょうか。このことは、老人クラブの存続にもつながってくると思います。

⇒開放型のクラブへ　⇒地域への貢献をＰＲ　⇒仲間づくり活動

２　クラブに魅力がない。（魅力が感じられない。）

加入のメリットとして

・地域に仲間ができる
・健康の保持・増進ができる
・今までの経験や知識を生かし新しい能力を発揮できる
・社会活動の参画と貢献ができる
・心のやすらぎ、充実感が得られる

人それぞれに考え方があると思いますが、何事にも前向きな考え方、姿勢がないと自分の中でそれをメリットとは感じることはできません。クラブの内や外のみならず自分の中での考え方を変えていくことも大切です。

⇒イメージアップ　⇒参加型の楽しいクラブ活動へ
⇒見守り、ボランティア活動により社会的評価を得る。
⇒自分の中の考え方、姿勢の改革

３　地域との関係が希薄で、クラブ単独の活動が多い。

前項１にも関連しますが、地域における老人クラブの存在感がないと必然的に自治会、行政との関係も薄くなります。単独の活動になるとクラブの中で完結されることが多くなり、閉鎖的になる可能性も高くなります。

⇒地域の核（自治会、婦人会等）との連携　⇒地域ネットワークの活用
⇒地域連携による友愛活動

４　財源不足により、活動が思うようにできない。

行いたい活動が何であるかを明確にすることにより、目標ができます。その為の財源をどのようにして確保するかを会員の皆で考え、関係機関へ協力を求めていくことも必要です。それが個々の生きがいにつながれば最高です。

⇒これまでの知識、経験による生産、収益活動　⇒「生きがい就労」の場づくり＊

５　若手会員、リーダー不足により、会長が退任するとクラブ事態が消滅。

クラブの存続のキーワードが、主にリーダー不足となっています。前述のとおり、クラブ内の会員の平均年齢は益々上がっており、高齢の会長が退任するとそのクラブ自体が無くなっていく傾向が見られます。そのクラブの中には、まだ活動したい人もいます。自然消滅を防ぐためにも、必ず事前に連合会に相談したりクラブの中での仕組みを作っておく必要があります。

⇒若手リーダーの育成による組織の活性化。
⇒女性パワーの活用　⇒会員増強と組織の活性化につながる。

６　高齢者の個人行動化により、社交性が低い。

全体的に個人の趣味や活動が多様化している中で、なかなか集団で物事を行うことが以前に比べ少なくなっています。ある新聞に「６０代は家族もいて、自分が孤独になるとは思っていない。しかし、８０代になった時に孤独でない保証はありません。」と掲載されていました。今は、個人行動できていても、先ではそれも出来なくなる可能性があるということです。

この高齢化社会の中で、地域の中での支え合い、高齢者同士の支え合いが暮らしの中で非常に重要なキーワードになっていることは否めません。

⇒健康づくりに関連した活動　⇒シニアスポーツ、フォークダンス、コーラス、ゲーム等
⇒地域における高齢者の暮らし支え合い　⇒話し相手、見守り活動、日常生活の補助等

＊「生きがい就労」とは・・・
慣れ親しんだ生活スタイル＋地域貢献・無理ない範囲・人との関わり

「老人クラブのこれまでの英知を自由な社会の中で出せる集合体に変えていかなければならない。自分が選択したものであれば、主体的に関わっていくことができ、活性化へと繋がる。」

【高齢者の地域活動活性化のポイント】

●地域包括ケアシステム（住み慣れた地域で誰もが安心して暮らし続けることができるように、生活支援・介護予防の役割を担う）の中での老人クラブの役割とは

〔地域の高齢者が求めるサービス〕

① 身近な生活に関する困りごと・・家電の取付・修理、住宅の修繕等
② 交通手段の困りごと・・病院、買い物、金融機関等への訪問
③ 地域とのコミュニケーション・・日常の話し相手、健康相談等

★高齢者の暮らし支え合い運動

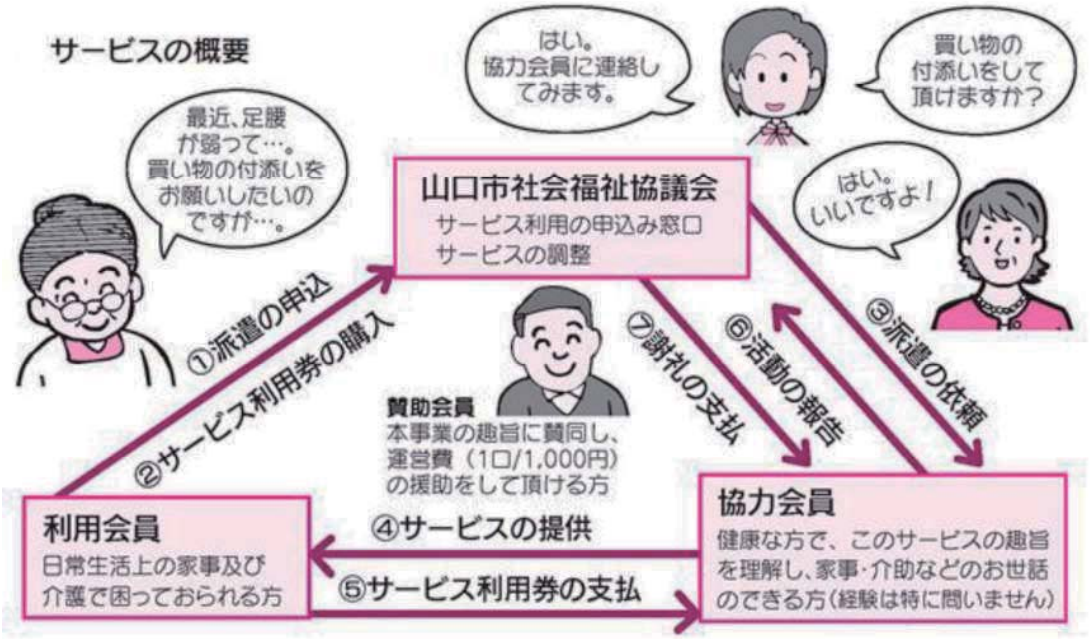
※有償在宅福祉サービスについて、山口市阿知須地域での事例

〔地域の現状〕

・旧町内全域で高齢化が進み、一人暮らし高齢者も増加している。
・介護保険の認定に至っていない高齢者や身体機能の低下でコミュニティタクシー等の公共交通機関を利用できない高齢者について介助や移送のニーズがある。

〔取組の概要〕

・制度に登録した利用会員・協力会員のサービスで、日常生活の困りごとの手助けを有償で実施（賛助会員は制度の応援団として協力）する。
・市社協阿知須支部が窓口となり、利用者からの申込と協力会員の派遣をコーディネイトする。
・利用者は、利用料を協力会員にサービス利用券で支払い、協力会員は社協で利用券を活動費として受領する。



〔サービスの内容〕

・食事の支度　・衣類の洗濯、補修　・住居等の掃除、整理整頓及び補修
・生活必需品等の買い物　・医療機関との連絡、通院介助　・代筆、朗読
・留守番、外出時の介助　・除草、庭木の剪定等（敷地内）
・その他（話し相手、幼児の世話等）
・原則として、月～金曜日の 9 時～17 時までとし、1 時間単位で実施する。
・次の日は、原則として行わないこととします。
　＜土曜日、日曜日及び祝日、年末年始＞

〔運営の特長〕

・住民相互の助け合いを基調としており、地域住民が会員となって制度に参加している。
・一定のニーズはあるものの制度の隙間になっている分野に対応することによって、高齢者の生活の包括的支援につながっている。

〔課題〕

・利用量に対して、協力会員に過度の負担がかからない程度に協力会員数を確保することが必要です。
・希望はあるものの制度参加・サービス利用に至っていないニーズの把握と参加促進。

〔今後の展望〕

・各種の制度の対象とされていない潜在的なニーズの掘り起こしに努めるとともに、生活に関するサービスを包括的に提供できるような「しかけ」づくりを行う。
・若年層の協力会員としての参加を促進し、会員の増加に取り組む。
・今後の地域福祉の在り方を見据えて、サービスの利用しやすさを向上し、制度を継続していく。

〔まとめ〕

・制度の基本的な位置づけは住民相互の助け合いである為、利用者のニーズに的確に対応できる、コンパクトで実効性の高い制度となっています。
・サービスを有償にすることで、利用者の心理的負担の軽減と、協力会員の責任感の醸成、利用の容易さをあわせ持つ制度を実現しています。
・地域の情報に精通した社会福祉協議会がコーディネイト業務に関わることで、利用会員、協力会員の関係がスムーズになり、円滑な運営が図られています。
・アンケート調査により、移送サービス、子育てサービス等も加わり年間約 500 時間の利用実績があります。

※老人クラブとして「高齢者の暮らし支え合い運動」に取り組むためには・・・

○単位クラブの中で地域活動を行うためには、社会（地域）を支えていく**仕組みづくりが必要**です。

↓

老人クラブ活動の社会認知と評価により老人クラブの活性化が進み

↓

老人クラブの増員につながる

○老人クラブ活動状況の収集で、その成功事例、失敗事例（プロセス）の検証や、高齢者の活性化を実証し、若い世代へ事業継承していくことが大切です。

○福祉サービスは有償か無償か

有償性という概念はなく、基本的には地域貢献としてお互いの助け合いのために行います。

●若手・女性会員の増強

課題：現在の老人クラブの年齢構成では、80 歳以上が最も多く、クラブ内での高齢化が加速しています。それに伴い、クラブの後継者不足、会員数の縮小により解散、休会が増えています。

★若手委員会、女性パワーの活用

・単位クラブの総会員数が多いほどその中での若手会員及び女性会員が少なく、逆にクラブの所帯が小さいほど両者の占める割合が多い傾向があります。

・壮年会（50～60 歳代）等、老人クラブの前身から地域貢献、自治会行事に参加しながら、自然に老人クラブへ入会していく仕組づくりが必要です。

・若手、女性が入りやすいような環境を整備し、趣味の会、活動の機会（チャンス）の創造が求められています。

○女性は社会の中でコミュニケーション能力が高いのではないか。

⇒口コミによる会員勧誘

「これからの老人クラブは、根本的な地域の特性を考慮し、成功事例、失敗事例を収集しながら、地域包括ケアシステムの中での役割が明確となり、結果的に会員増強につながるという目的を持った活動プロセスが大切である。」

↓

会員増強に向けての取組

【会員増強につながる仕組づくり】

●老人クラブがめざす４つの視点から施策を導く

１　地域づくり

地域の中では、老人クラブとしての位置づけを明確にしながら行政、自治会、社協との連携・協働の仕組において重要な存在であるコーディネーター（管理・統制役）及びファシリテーター（企画・進行役）を架け橋として地域づくりを進めていきます。

まずは、目的意識の高いものでなく気軽に参加できる地域行事から参加してもらい、人と人との交流の中で地域に自然と溶け込んでいくことが大切です。また、老人クラブが公共性を持つことも重要で、高齢者の地域（まち）をその一員としてどのようにして支えていくのかを皆で考えていきます。

≪老人クラブは、地域やふるさとづくりを推進し、地域の安心・安全を守る防犯・防災活動団体です。≫

２　仲間づくり

地域の中では、楽しみながら仲間づくりのできる場所が必要で、サロンや趣味の会等のサークル活動で会員増強に結び付けています。また、自治会との連携を密にしながら顔を合わせることでつながりもできます。

また、若手や女性が参加しやすい場づくりも重要なポイントになります。

しかし、「楽しさ」だけではクラブは長続きしません。**地域づくり**では、暮らし支え合い、見守り等の友愛活動、環境美化活動による地域貢献、**健康づくり**では、健康寿命を伸ばすための運動、健康学習等、さらに**生きがいづくり**では高齢期の充実として前述の生きがい就労、趣味、レクリエーション等４つの**「づくり」**がつながっていくことが大切です。

≪老人クラブは、高齢者の新しい生き方、暮らし方を創造する団体です。≫

３　健康づくり

厚生労働省の発表（平成 26 年 10 月 1 日）によると、2013 年のわが国の健康寿命は、男性が 71.19 歳（対 2010 年比＋0.78 歳）、女性が 74.21 歳（同＋0.59 歳）に伸びたそうです。健康寿命とは、健康上の問題がない状態で 日常生活を普通に送れる期間のことですが、その健康寿命と平均寿命の差は、男性で 9.02 年、女性で 12.4 年あります。すなわちこの期間は介護など人の手助けが必要となる可能性が高いと思われます。

それでは、どのようにして健康と向き合っていけばよいのか。市町では、サロンがあり、いろいろな活動・活躍の場があります。行政との連携で、運動の場やそのメニューを皆で考え増やしていき、誰もが参加しやすい環境をつくることが大切です。

≪老人クラブは、健康づくりや介護予防を実践している団体です。≫

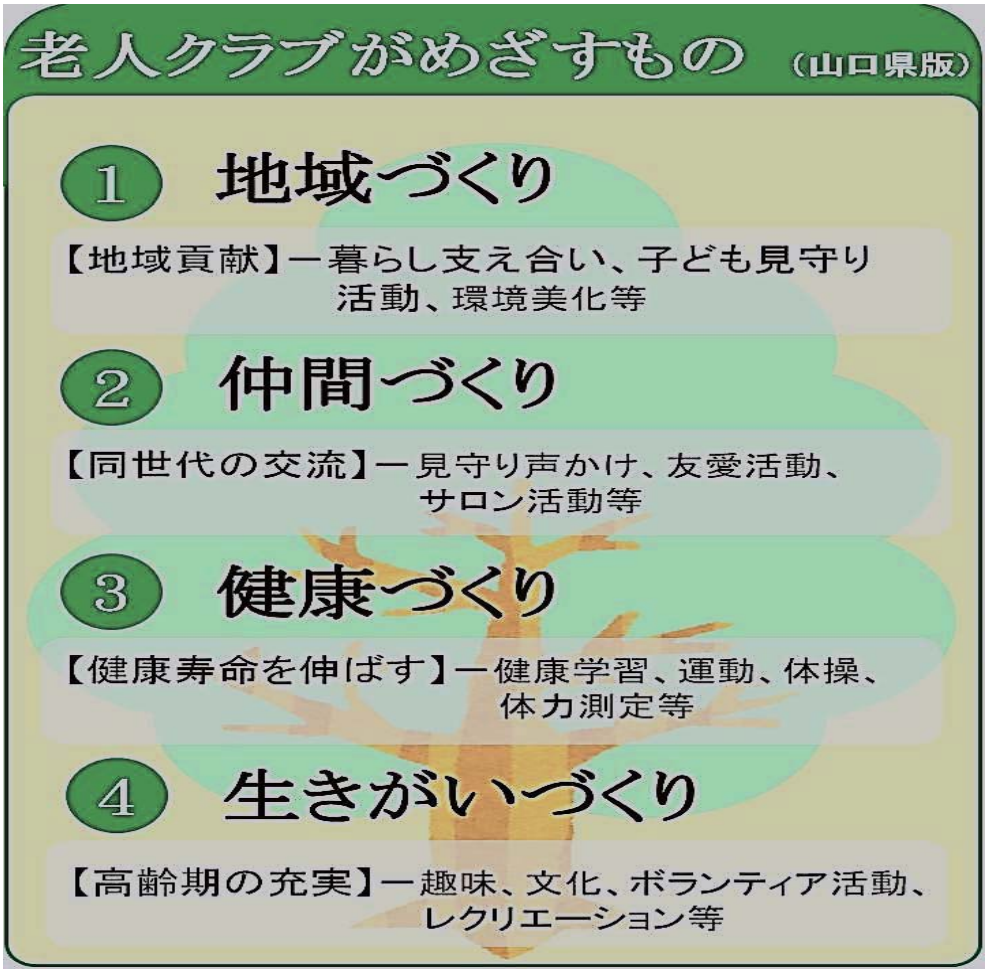
４　生きがいづくり

高齢者の社会参加活動は、高齢者の生きがいのみならず、閉じこもり防止、身体機能の向上、地域貢献につながるなど、多様な意義があります。今後、団塊の世代が高齢期を迎える中で、高齢者のライフスタイルや価値観が更に多様化していくことが予想されます。新しい高齢者のニーズや志向なども踏まえ、さまざまな社会参加の機会を確保することが大切になります。また、地域においても、今後、高齢者の社会参加が進み、高齢者が地域活動の担い手となることは、地域づくりの観点からも重要となります。

高齢者がこれまでに培った経験や能力を発揮する場面がなかなか見当たらない現在では、どのようにしたら社会参加活動が容易にできるのでしょうか。

まずは、地域における場所の確保です。地元商店、集会所等を利用し、人が集まりやすいイベントを企画し、人が集まり、顔が見えてつながりができます。趣味の延長、自分一人ではできないことを老人クラブに協力してもらい、チームで物事を進めていきます。その中で、自分の「やりがい」や「生きがい」を見つけることが大事です。またその中には、コーディネーター役の人が必須となります。

≪老人クラブは、友愛活動や人と人との交流、地域文化の継承を促進している団体です。≫



●老人クラブの特異性及び存在意義とは

市町にあるコミュニティは、その地域の中にある老人クラブをどのように見ているのでしょうか。「老人クラブがあってよかった」、「これは老人クラブにやってもらいたい」等の意見もありますが、実際は地域の中で必要とされているのでしょうか。

また、今後老人クラブが地域の中で注目されるためにはどのように活動していったらよいのでしょうか。合併により地域が大きくなった現在では、地域の中での存在価値を問われています。

高齢社会を迎えた現在では、高齢者が高齢者を支える社会づくりが必要になりました。自立した独自の活動を期待する生きがいづくりやボランティア活動など、地域で活動する老人クラブの存在意義は、今後ますます大きくなっています。

では、どのようにしたら老人クラブへの会員増強につながるのでしょうか。クラブに入会するメリットをキーワードに「遊び」と「社会貢献」の２つの視点で考えていきます。

・「遊び」・・課題　⇒楽しい興味あるイベント参加の間口を広げることにより、非会員でも参加できる。⇒会員加入につながらない。

対策　⇒老人クラブ傷害保険や施設優待券等の老人クラブ会員限定の特典を増やしていく。単発的な遊びを継続した趣味の会へ、そこから輪を広げていく。

メリット　⇒地域に新しい仲間ができます。シニア・スポーツ等への参加を通じて、健康の保持・増進ができる。

・「社会貢献」・・課題　⇒地域の中で「良いこと」をしているにもかかわらずその地域で認知されていない。

対策　⇒介護予防や地域の環境美化活動など老人クラブの活動情報を広く発信し、また自治会の中で単位クラブの大切さを訴求していく必要がある。

メリット　⇒社会活動への参画と地域貢献ができます。活動を通じて満足感や充実感など多くの精神的な喜びを味わうことができる。

●これからの老人クラブは

平成 26 年 11 月 22 日に長野県白馬村で起きた地震は、震度 5 強という強い揺れで 40 棟以上の住宅が全半壊しながらも死者をゼロに抑えた事例があります。後に「白馬の奇跡」とも呼ばれたこの事例は、地域の住民同士の強い結びつきと自治会組織、行政が策定していた「災害時住民支え合いマップ」が非常に重要な役割を果たしていました。

この「災害時住民支え合いマップ」は、白馬村の住民の安否確認システムで災害時の避難に支援が必要な高齢者など要援護者のいる家庭が地図上に書き込まれています。また、近所の誰が支援者となるかが決まっており、安否確認は地域の連絡網ができており最終的に各区長に報告が届くようになっていました。これらは地域の自主防災活動あるいは住民同士が助け合う共助と言えますが、スピーディーな安否確認や救助を可能にしたのは各自の役割が明確になっていたことがうかがえます。

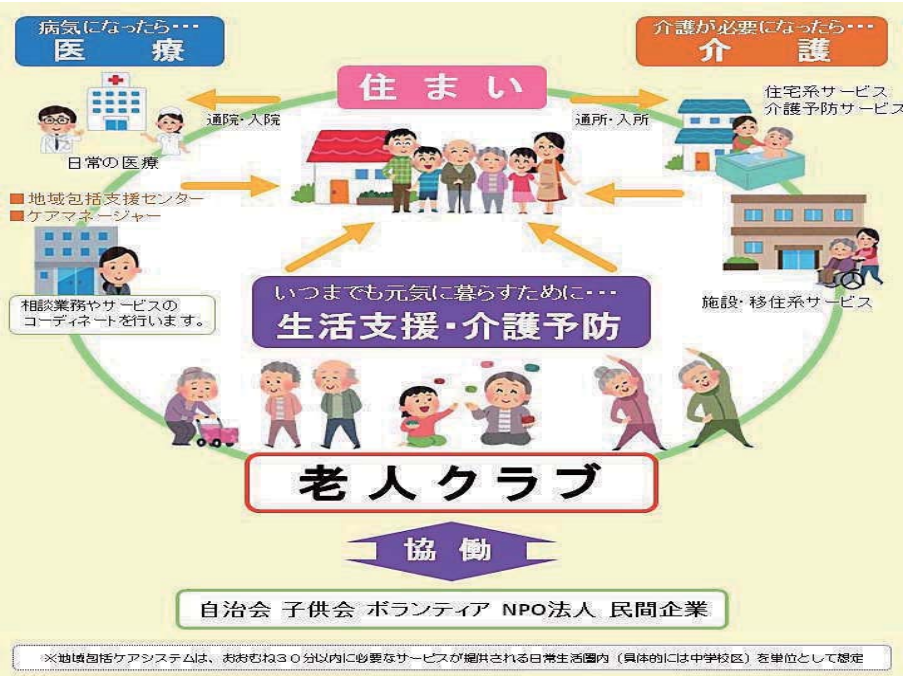
このような、好事例を教訓として「地域の力」、「つながりづくり」を進めていければよいと思います。

老人クラブは、地域から公共性の高い役割を任されています。これが老人クラブの魅力でもあるのではないでしょうか。地域から要望、期待、認知を受け、地域を支える集合体であれば、必ず人（会員）も集まってくるのではないでしょうか。

最も大切なことは、皆さんが老人クラブ会員として「自信」と「誇り」を持って活動しているという認識です。

地域包括ケアシステムの中でも老人クラブの名前が挙がっており、老人クラブには「生活支援」、「介護予防」に大きな役割が期待されています。

これからは、その「公共性のある老人クラブ」が強みであり、それを前面に押し出して活動していくことがクラブにとっても非常に重要な要素であり、クラブの存続と発展に寄与するものと感じています。



【全国老人クラブ連合会からの提唱】

●「新地域支援事業」に向けての行動提案について
～老人クラブ高齢者が介護予防・生活支援の担い手に～

※「新地域支援事業」とは

平成 26 年 6 月「地域における医療及び介護の総合的な確保を推進するための関係法律の整備に関する法律（医療介護総合確保推進法）」が可決・成立しました。この法律は、持続可能な社会保障制度の確立のため、効率的かつ質の高い医療提供体制と地域包括ケアシステムの構築を目指すものです。

これにより介護保険制度が見直され平成 27 年度から 3 年間で、これまで全国一律であった要支援者に対する訪問介護や通所介護が、保険の給付対象から市町村が行う新たな地域支援事業に移行されることになりました。

この見直しは、高齢者の多様な介護・生活支援ニーズに応えるため、全国一律のサービスの種類や内容等によらず、地域の実情に応じた取組を推進することにあります。

今後、介護事業者に加え、企業・協同組合・各種法人・社会福祉協議会や自治会・町内会・老人クラブ・ＮＰＯ・ボランティア等の住民が主体となって多様なサービスを提供する地域の支え合い体制づくり（**新地域支援事業**）が全国的に進むことになります。

１　高齢者の抱える課題

高齢者は介護や介護予防といった課題を抱える一方で、人間関係の希薄化や「社会的孤立」から生じる様々な福祉・生活課題を抱えています。

介護保険制度は、高齢者の尊厳の尊重と自立支援を支えるうえで大きな役割を果たしていますが、残念ながら制度では支えきれない多くの課題があります。

この新地域支援事業が創設されるに際して、「多様な通いの場づくり」や「多様な生活支援」の活動や事業によって、住み慣れた自宅・地域での暮らしが可能な限り継続できるようにしていくことが重要になります。

２　概要

（１）新しい総合事業

① 介護予防・生活支援サービス事業（要支援者が対象）

ア．　訪問型・通所型サービス

・介護事業者によるサービスの提供

訪問型：掃除、洗濯等の日常生活上の支援

通所型：機能訓練や集いの場等日常生活上の支援

・多様な通いの場づくり

ミニデイサービス、地域サロン、コミュニティカフェ、認知症カフェ、住民主体の交流の場、体操教室、運動・栄養・口腔等の教室等

イ．生活支援サービス

・栄養改善を目的とした配食や一人暮らし高齢者等への見守りの提供

・多様な生活支援

見守り、安否確認、配食、緊急時対応、外出支援等

ウ．介護予防ケアマネジメント

総合事業によるサービス等が適切に提供できるようにケアマネジメントする

② 一般介護予防事業（すべての高齢者が対象）

介護予防に関する情報提供、広報活動、健康教育、ボランティア養成、体操教室等の高齢者の自発的な取組への支援

・介護予防把握事業：収集した情報を活用し、閉じこもり等何等かの支援を要するものを把握し、介護予防活動へつなげる

・介護予防普及啓発事業：介護予防活動の普及・啓発を行う

・地域介護予防活動支援事業：住民主体の介護予防活動の育成・支援を行う

・一般介護予防事業評価事業：介護予防事業計画に定める目標値の達成状況等を検証し、一般介護予防事業の評価を行う

・地域リハビリテーション活動支援事業：介護予防の取組を機能強化するため、通所、訪問、地域ケア会議、住民主体の通いの場等へのリハビリ専門職等による助言等を実施

（２）新しい包括的支援事業・任意事業

・包括的支援事業

地域包括支援センターの運営、在宅医療・介護連携の推進、認知症施策の推進、生活支援サービスの体制整備（コーディネーター配置、協議体設置等）

・任意事業

介護給付費適正化事業、家族介護支援事業他

３　「新地域支援事業」に向けての行動提案（案）

（１）市町行政との協議・連携により、行政、地域住民、関係者とのつながりを保ちます。

（２）協働の場（協議体）への参画により、老人クラブ活動をアピールし理解を得て連携を深めます。

（３）老人クラブ活動を生かした新地域支援事業への貢献

　これまでに取り組んできた友愛活動の経験を生かし、介護予防、生活支援サービスの担い手として行政や地域住民、関係者との協働関係を築いていきます。

（４）新地域支援事業への参画が老人クラブの活性化を促し、それが老人クラブの会員増強につながります。

【会員増強への主な取組】

県老連

［名　称］

きららシニア山口　仲間１００^{2}増やす運動

“クラブ仲間　プラス　２人作戦”（仮称）

［主な実施内容］

１　高齢者地域活動活性化検討会議の開催における検討

目的：老人クラブ活動をはじめ高齢者の地域活動の活性化を図るため、山口県老連として基本方針を策定する。

また、高齢者（老人クラブ）の課題の抽出と具体的施策の策定を行い、県老連としての事業化をめざす。

“地域包括ケアの中での老人クラブの役割”を考える

〇高齢者生きがい活動

・暮らし支え合い運動　⇒介護予防・生活支援　⇒地域貢献　⇒会員増強

〇老人クラブ存続活動

・若手・女性会員の増強　⇒クラブの存続、口コミ強化　⇒会員増強

２　広報活動の中でのＰＲ

目的：会員増強運動を地域の単位クラブへ広く、確実に浸透させ、また未加入者が入会したいと思えるような情報提供を行う。

・ホームページの開設・・県老連の情報公開⇒県内各地での活動紹介、地域文化伝承館への取組状況等を掲載する。

・県老連独自のパンフレット作成・・会員増強に向けて最前線の単位クラブへ周知する。

・県老連広報誌での紹介・・「きららシニア山口」で事例等の紹介する。

３　県老連事業の中でのＰＲ

目的：会員増強に向けて、運動趣旨を各市町老連から単位クラブへ徹底、周知していく。

・県老連の中での運営委員会、研修、女性委員会等及びねんりんピック地域文化伝承館におけるイベント等にて、会員増強の推進を図る。

市町老連

［主な実施内容］

・単位クラブへの表彰制度・・各単位クラブへ純増人数により報奨金を支給する。

・入会する地域にこだわらずに、まず入会してもらう。

・会報誌で、賛助会員、サポーター企業を増やし未加入者へＰＲする。

・解散、休会クラブの復帰活動・・多数の人員確保が可能となる。

会長不在により他のクラブを紹介してクラブ存続を図る。

まだ、なかには老人クラブ活動を続けたい人がいる！

・市町社協が行う「いきいきサロン」へ出向いて、加入を説得する。

・「いきいきサロン」から老人クラブ企画の作品展示へシフトして加入を促進する。

・単位クラブの後継者づくりとリーダーの育成を行う。

・地域の民生委員、福祉員との連携で、見守り活動を行う。

・クラブの特徴とする活動を地域の中で、推し進め会員を募る。

・特に若手への老人クラブの入会メリットを考慮していく。

・会員増強委員会を設置し、自治会との連携を取りながら勧誘する。

〔平成２６年度市町老連運営研究協議会　会長部会より〕

高齢者地域活動活性化検討会議

各委員からの提言

『高齢者（老人クラブ）の活性化について思うこと』

高齢者地域活動活性化検討会議　委員長
公立大学法人 下関市立大学
経済学部　教授　難波　利光

地方における人口減少問題が顕著になり、地方の生活形態に大きな変化が起こることが予想され始め、多くの人たちは将来に不安を感じる時代になってきました。山口県は、高齢化率が高く高齢者福祉に関する財政支出も増大することが予想されます。さらに、地方都市ならではの産業構造から経済的な衰退も危惧されています。このような社会状況に対し、高齢者という人的資本を有効に社会のためにも活躍する場を作ることが求められています。高齢者は、これまでの人生経験から様々な知恵があるといえます。これは、よく若い人の力と地域を活性化させるときに言いますが、高齢者も例外ではありません。ただ、これまで現在のような高齢化を迎えたことのない自治体にとって高齢者への対応は試行錯誤が求められています。特に、高齢者に対する地域活動活性化は、地域福祉の視点と地域経済的な視点の両面の要素を持ち、縦割り行政では対応が難しいこともあります。

そこで、地域の福祉的課題については、社会福祉協議会や老人クラブといった地域への取り組みを長年に渡り取り組んできた機関が役割を果たすことが期待されます。高齢者の活力を還元する方法として、よくボランティア活動が取り上げられます。地域のために活動を行うことは非常に大切なことですが、無償のボランティアではなく、ソーシャルビジネスに取り組む機会を設けることも必要といえます。身近な問題をビジネス化することで解決するソーシャルビジネスは、高齢者にとって生きがい作りとしても有意義な時間となります。また、地域経済の面でも大きな貢献が期待されます。

介護保険制度は、地方自治体にサービス内容を委ねる方向性が出ており、財政力によってサービスの差が出てくることが予想されます。老人クラブは、そういった地域によるサービスの格差を補うための組織としても活躍できます。これまでも老人クラブは、様々なサービスを提供してきました。特に地域で高齢者の活動を支援し、健康をサポートしています。現在は、地域づくり、仲間づくり、健康づくり、生きがいづくりといった幅広い地域活動を支援する試みを行っています。特に過疎地域においては、民間企業がサービス提供を行っていないため、これらの支援はとても重要です。高齢者の孤独が問題とされている昨今、直接に人と人が会話できる環境作りは何よりも重要なしくみです。

老人クラブが、地方に住む高齢者にとっては、生きがいを高めていくために必要不可欠な存在になることは必然であると思われます。

『高齢社会での老人クラブ活動の役割』

高齢者地域活動活性化検討会議　副委員長
山口市議会議員　山本　貴広

阿知須地域でシルバーパワー開発クラブが設立されたのが平成８年９月です。阿知須にはシルバー人材センターがなく、地域住民の皆様方から、草刈りの要望がかなり出始めた事を受けて、老人クラブ活動の一環で有償による活動がスタートしました。個人からの依頼はもとより、草ぼうぼうの空き地を管理している団体からの依頼に応えて、会員９人が緩やかなルールをつくり、生き活きと汗を流され確実に成果をあげる地域貢献活動を展開しました。

老人クラブの事務局を預っていた私がそのコーディネート役を担わせていただきました。今までになく新鮮な風を感じた事をよく覚えています。福祉の世界以外の一般の方々に接する機会を得て、地域には様々な方が居られ、それぞれの思いを持って生活をされています。

平成14年に、シルバー人材センターが発足されましたが、このメンバーは当初コアメンバーとして、100名の会員のリーダー役となって今日に至っています。

メンバーの中で、竹炭に興味をもたれ、竹の伐採から竹炭づくりまでを担う、環境ボランティアサークル「てごクラブ」に改名して年収100万円を超える事業にまで成長しました。残念ながら会員の高齢化などを理由に、現在ではその竹炭づくりは個人でされています。

高齢者は未知の可能性を秘めておられ、これまで培って来られた知識や経験を存分に発揮できる老人クラブ活動の活性化が求められています。私の父は、60歳の定年を機に地元の老人クラブに当り前のように入り、地域の仲間と共に生きがいとやりがいを持って活動して28年が経過しようとしています。

今は、その当り前がそうではない時代となり、高齢者の増加とは裏腹にクラブの加入率を下げています。「活性化」と口で言うのは容易いけれど、70歳になってからクラブに入るかどうか考える人が増えて来ています。

魅力ある老人クラブ活動とはどのようなものなのかを考えた時に、やはりそこには人が存在し、仲間づくりや地域づくりを楽しく行う人に働きかけることが重要です。

いよいよと団塊の世代が65歳を迎え、これから後期高齢者となるこの10年間がこの高齢社会を乗り越えるキーパーソンになります。団塊世代をターゲットに老人クラブが目指すべき方向に興味を持ち、担い手となる仕掛けづくりが求められています。生涯現役社会を構築するうえでも大変重要になります。まずは、この世代のニーズを掴むことから始めては如何でしょうか。

『山口県における老人クラブ活動の活性化について』

高齢者地域活動活性化検討会議　委員
子どものあそびネットワーク山口　代表　山野井　隆

我が国は世界に類をみない速度で高齢化が進んでおり、経済の発展とともに大きな変貌を遂げ、個人主義的な傾向、核家族化による一人暮らし高齢者の増加、隣人との意思疎通が図られないなど人間関係の希薄化、趣味や嗜好の多様化などにより、地域社会での連携を構成する要因が阻害される傾向が強まるなど、新たな課題が生まれています。

山口県における老人クラブの活動はクラブ会員自らの健康を維持し、生きがいを高め、奉仕などの社会活動を通じて地域を豊かにする活動として積極的に展開されています。しかし、総人口に占める65歳以上の方の割合は、年々増加しているにも拘らず、近年は老人クラブ数や会員数が減少しているのが現状です。

このように老人クラブの活動が低下している原因は何か。また、超高齢社会を目前にして高齢者が生きがいを持ち、住み慣れた地域で安全安心に暮らすためには老人クラブはどのような役割を担うべきか、また、このような老人クラブを取り巻く課題を探り、整理することが必要と考えられます。高齢者は地域において安心して生活できるよう支援を受ける側となるばかりでなく、地域とのつながりを持ちつつ「地域社会を支える担い手」として社会参加していく時代になり、ますます老人クラブの活動の場が広がりつつあります。しかし、社会全体をみると老人と言われる人たちの多くは、生活のための働きを余儀なくされているのも現状です。

自らの生きがいを高め、健康づくりを進めるために、文化・スポーツ活動、老人クラブ活動、ボランティア活動など多様な社会参加の機会は多くありますが、「団塊の世代」と言われた人たちは生活の中心が、会社から地域社会活動へと移行するのはそう容易なことではないようです。

老人クラブの活動も市町村によって温度差があり、都市型中心の老人クラブは、どちらかと言えば趣味のサークル活動が中心で、自分の生きがいづくりとして活動しているのが多くみられます。また、逆に過疎化の進む中山間地域では、清掃や防犯、高齢者への声かけさらには、防災といった不可欠な公共的な活動のほか、スポーツ活動や文化活動といった趣味的なものも多く取り入れた活動をしています。

老人クラブ会員が年々減少している背景にはクラブ数、会員数が減少するとともに会員年齢の高齢化が問題になっています。「会員の増加」と「若い会員の加入」が解決の目標になるのですが、やはりクラブの活動を支えていくリーダーの役割が必要ですし、個人個人の優れた才能を発揮させる場の提供も老人クラブの活性化の力と言えます。

山口県の老人クラブにおける、より一層の会員増加への期待はありますが、まず身近な人達を誘い合い、生きがいづくりの場として地域の小さな活動から参加してもらう機会をつくっていくことが大事だと考えます。

『高齢者（老人クラブ）地域活動活性化へ向けて』

高齢者地域活動活性化検討会議　委員
長門市老人クラブ連合会　女性部部長　田中　多雅子

長門市老連では、現在はまだ行政との関わりが薄く、孤立しているような状況で、趣味のグループは多数ありますが、それがなかなか会員増強に結びついていないのが実態です。また市老連として、新しい活動が良い事とは思っていても、今一歩前に踏み出せないのが現状です。

私は今までの市老連の行事、やり方を踏襲していくことが無難だと考えていましたが、今はそのような事を言っている場合ではないと痛感しています。

会員一人ひとりが現状の課題を自分たちのこととして考え、危機感を持って、この「活性化」について考えていく時期だと思っています。

そこで、今回の高齢者地域活動活性化検討会議をきっかけに長門市老人クラブ連合会として下記について取り組むことを考えました。

１　現在の会員の意識調査（クラブ活動、クラブの実態等について）を行う。

２　未加入者へのアンケート（設問は地域性を考慮して）を行う。

３　自治会等地域との連携を密にして、活動目標を設定する。

４　年度ごとに活動目標に対しての達成度、要因の検証をしっかり行う。

会員が増えることによって、老人クラブとして地域に「できる事」が増えます。それによって自分の地域が少しでも「活性化」すれば、地域における老人クラブの「存在感」も増していき、高齢者のみならず地域のみんなが笑顔になれると思っています。

『高齢者（老人クラブ）地域活動活性化へ向けて』

高齢者地域活動活性化検討会議　委員
美祢市老人クラブ連合会　主任　伊賀　信之

山口県では、平成７年より人口減少傾向がはじまり、65 歳以上の高齢者を占める割合が増加し近年、高齢化率が 29％となっています。当市でも、人口減少が進み、平成 26 年の高齢化率が 36.4％となり、高齢者人口が増えていることがわかります。

高齢者が増える中、当市の老人クラブでは、会員、単位クラブの減少が大きな課題となっており、平成 22 年から平成 26 年の４年間で、会員数 436 名、単位クラブ数６単位が減少となっています。また、60 歳以上の高齢者が老人クラブに加入している人数は、1,342 名（平成 26 年４月１日現在）と 60 歳以上高齢者人口数の 11％の加入しかありません。

このような現状は、単位クラブの若手会員の加入率が低いこと、また地域の老人クラブの存在認知が薄くなってきたことも原因としてあると考えます。老人クラブ活動を行うにも、内部で高齢化が進み、年々活動自体が低迷していき、会員も減少し単位クラブの存続も難しくなっています。

老人クラブが地域活性化するには、若手、未会員又、女性会員の加入促進と活動参加の窓口を大きく広げ、誰でも参加できる体制づくりをしていき、地域に老人クラブをアピールできる場所づくりをしていく必要があります。

まず、どのように老人クラブをアピールできるかを考えると、老人クラブ１団体の活動を行うのではなく、地域自治会の中の１団体として存在し、今まで培ってきた豊富な知恵、経験を発揮し、他の団体、地域住民と協働で活動をすることが一番のアピールと考えます。活動を共にする若手、未会員へは地域活動をとおして、老人クラブ主催のレクリエーション、趣味の活動にも参加してもらい、実際の活動をとおして加入促進を促すことが自然的で加入しやすいのではないかと思えます。

更なる活性化に向けて自治会のみの繋がりだけでなく、行政、福祉関係団体とも連携し、そのネットワークを活用し、住み慣れた地域で安心して暮らせるよう、地域づくり、仲間づくり、健康づくり、生きがいづくりを柱に、老人クラブが地域を変えていける存在になりたいと思います。

高齢者地域活動活性化検討会議設置要綱

１　目的及び設置

この要綱は、老人クラブ活動をはじめ高齢者の地域活動の活性化を図るため、基本方針を策定することを目的に、高齢者地域活動活性化検討会議（以下「検討会議」という。）を県老人クラブ連合会に設置する。

２　業　務

検討会議は、次に掲げる業務を行う。

（１）高齢者地域活動活性化方針に関すること。

（２）多様な老人クラブ活動の活性化策に関すること。

（３）その他、必要な事項に関すること。

３　組　織

検討会議は６人以内で組織する。

（１）　メンバーは、次に掲げる者のうちから会長が委嘱する。

ア　学識経験者

イ　県市町社会福祉協議会の役職員

ウ　県市町老人クラブ連合会の役職員

（２）　委員の任期は１年とする。ただし、補欠委員の任期は前任者の残任期間とする。

（３）　検討会議には、必要に応じてオブザーバーやゲストスピーカーを置くことができる。

４　委員長及び副委員長

（１）　検討会議に委員長及び副委員長を置く。

（２）　委員長及び副委員長は、委員の互選により定める。

（３）　委員長は検討会議を総括し会を代表する。

（４）　副委員長は、委員長を補佐し委員長に事故があるとき又は委員長が欠けたときはその職務を代理する。

５　会　議

（１）　検討会議は、委員長が召集する。

（２）　検討会議の議事進行は、委員長をもって充てる。

６　その他

この要綱に定めるもののほか、検討会議の運営について必要な事項は委員長が別に定める。

７　施　行

この要綱は、平成２６年６月１日から施行する。

高齢者地域活動活性化検討会議委員名簿

【任期：平成２６年６月１日～平成２７年３月３１日】

所　　属	職　名	氏　　名	備　考
下関市立大学	教　授	難　波　利　光	委員長
山口市議会	議　員	山　本　貴　広	副委員長
子どものあそびネットワーク山口	代　表	山 野 井　隆	
長門市老人クラブ連合会	女性部長	田　中　多雅子	
美祢市老人クラブ連合会	主　任	伊　賀　信　之	

（敬称略）

【事　務　局】

所　　属	職　名	氏　　名	備　考
山口県老人クラブ連合会	事務局長	澤　村　有利生	
山口県社会福祉協議会　生涯現役推進センター 山口県老人クラブ連合会	センター長 活動推進員	小　川　師　生	
山口県老人クラブ連合会	嘱　託	佐　藤　淳　夫	
山口県老人クラブ連合会	嘱　託	奈　良　真　弓	
山口県老人クラブ連合会	嘱　託	白　松　直　美	
山口県老人クラブ連合会	職　員	柳　井　智　子	

高齢者地域活動活性化検討会議委員名簿

【任期：平成２６年６月１日～平成２７年３月３１日】

所　　属	職　名	氏　　名	備　考
下関市立大学	教　授	難　波　利　光	委員長
山口市議会	議　員	山　本　貴　広	副委員長
子どものあそびネットワーク山口	代　表	山 野 井　　隆	
長門市老人クラブ連合会	女性部長	田　中　多雅子	
美祢市老人クラブ連合会	主　任	伊　賀　信　之	

（敬称略）

【事　務　局】

所　　属	職　名	氏　　名	備　考
山口県老人クラブ連合会	事務局長	澤　村　有利生	
山口県社会福祉協議会　生涯現役推進センター 山口県老人クラブ連合会	センター長 活動推進員	小　川　師　生	
山口県老人クラブ連合会	嘱　託	佐　藤　淳　夫	
山口県老人クラブ連合会	嘱　託	奈　良　真　弓	
山口県老人クラブ連合会	嘱　託	白　松　直　美	
山口県老人クラブ連合会	職　員	柳　井　智　子	

一般財団法人　山口県老人クラブ連合会

きららシニア山口 ホームページ

きららシニア山口（山口県老人クラブ連合会）の活動内容が満載！！
各地の老人クラブ活動の最新情報をご提供します。

きららシニア山口　　検 索　クリック！！

ホームページアドレス

http://kirarasenior.jp

（お問い合わせ）　一般財団法人　山口県老人クラブ連合会
〒753-0072　山口市大手町９－６　山口県社会福祉会館内
［電話番号］083－924－2838
［ＦＡＸ番号］083－928－2387

高齢者地域活動活性化検討会議報告書

発行：平成２７年３月

編集：一般財団法人 山口県老人クラブ連合会
高齢者地域活動活性化検討会議

〒753-0072　山口市大手町 9-6
Tel：083-924-2838